

広島ってすごいんじやけえ

《高校生・一般の部 金賞》

広島皆実高等学校一年 前田 侑杏

毎日、東広島と広島を行き来する生活を始めて約三カ月が経った。広島に来て感じたことがある。それは広島人の温かさだ。私は何よりこの広島人の温かさを世界中へ発信したい。

まず私が驚いたのは、駅で毎朝挨拶をしているボランティアの人だ。その人はいつも駅の出入口の所で「おはようございます。」と通る通勤・通学者へ声かけをしている。その挨拶で私は元気をもらえるような気がした。

次に、必ず助けてくれる人がいることだ。物を落としたら拾ってくくれる人がいる。あんなに忙しそうなおんなばかりなのに相手のことを思いやれる人がいるのだ。また、荷物を抱えている高齢者のそばにかけ寄り手伝っている人の姿を私はよく見かける。当たり前かのようにすつと手を差しのべられる広島人って本当にすごい。

私はまだまだ広島人のような温かさはない。はやく広島人の仲間入りを果たしたい。そして他人のことを思いやれる広島の魅力の世界中の人に知ってほしい。

誰ひとり取り残されない街へ

《高校生・一般の部 銀賞》

広島皆実高等学校一年 吉田 凜

「誰ひとり取り残さない」街になったらどんなにいいだろう。きっと誰もが安心して暮らせるのではないか。私は、広島がそんな街になればいいと思った。

数日前、学校からの帰り道に駅で、白い杖をついた視覚障害の方を見かけた。どこか困っている様子だったが、見て見ぬふりで誰も声を掛けようとしなかった。私は勇気を出して、「大丈夫ですか。何かお困りですか」と声を掛けた。するとその方が「切符が買えない」とおっしゃったので、目的地を聞いて切符を代わりに購入し、改札口まで案内した。「ありがとう」というたったの一言でも、私の少しの勇気により一人の方のためになれたと思うと、とても嬉しい気持ちになった。

たとえ体に障害のある方でも同じ社会で生活している限り、私たちの仲間である。勝手な偏見によつてのけものにされている障害者の方を助けたい。私はそう思った。だから、誰ひとり取り残されることのない街にするためには一人一人の意識を変えていかなければならない。

小さな幸せと笑顔

《高校生・一般の部 銅賞》

広島皆実高等学校二年 芦田 好葉

私は、私たちの住んでいる広島を笑顔で溢れる町にしたいと考える。なぜ私が、こんなにも当たり前のようなことを望んでいるかというところ、私のある蒸し暑い梅雨の日の出来事があったからだ。

私は、制服の衣替えのため、夏服を家の近くのクリーニング店へ持って行った。雨上がりだったその日はとても蒸し暑く、暑がりである私の気分は少し憂鬱だった。だが、その憂鬱な気分はクリーニング店に入ってすぐに消え去った。クリーニング店の扉を開けたと同時に、中に居たおばちゃんが「いらつしやい、今日は暑いねえ。」と私に向かってニッコリと笑った。それに続いておばちゃんは「もう夏服の時期なんだ。」と言った。私は「はい。そうなんです。」私の声の大きさに驚いたのか、おばちゃんはまた笑った。きつと私が気付く前に、扉を開けた時のおばちゃんの写真と笑顔と言葉が私の憂鬱を元気に変えてくれたのだ。

私のある日の出来事のような小さな幸せと笑顔が、私たちの広島で溢れていてほしい。だから私は、今日も笑顔で友人に話しかける。

ミライの意識

《高校生・一般の部 銅賞》

基町高等学校一年 柴崎 愛佳

私の両親は共働きだ。父は朝早くから夜遅くまで仕事。母は仕事に加え、ほとんどの家事をこなしている。両親には感謝しかない。が、なぜだろう。なぜ母ばかりが家事をしているのだろうか。きつとこの光景は我が家だけではなく、他の家庭でも見られるものだと思う。なぜなら、男は仕事・女は家事という「性別分業役割意識」の考え方が未だに残っているからだ。

この概念を覆す目標がある。それはSDGsの五番「ジェンダー平等を実現しよう」というものだ。最近注目されているが、常に意識している人は少ないだろう。私の考えとして、学校教育の中でジェンダー平等を重視するべきだと思う。例えば、普段から家事をする習慣を身につけさせる、などあたりまえのことを教えるべきだ。子どもが変わると大人が変わる。大人が変わると世界が変わる。今必要なのは私達、若者の意識なのだ。新しい意識を持って自分たちが望む「ヒロシマ」の街を創造していきたい。

地域の交流がたくさんある街へ

《高校生・一般の部 入選》

広島中等教育学校五年 木村 舞衣

私は広島が地域内の交流がたくさんある街になって欲しいです。私は小さな頃から子ども会に入っていなかったのですが、地域のイベントは私にとっては夏祭りや朝のラジ操体操だけでした。交流が少ないので、私の街では顔見知りの人が多くないのが事実です。そこで私は、広島が地域の交流がたくさんある街になって欲しいです。そこで私は二つの案を提案します。

一つ目は地域内でのボランティア活動です。例えば清掃活動では、自分達の地域の清掃によって自分達の街をより大切にしようという気持ちが高まります。またバザーなどでは、まだ使えるが捨てられてしまう物を減らすことができる為、環境にも優しいです。

二つ目は季節の行事を地域で行うことです。毎日をごっこしている中で季節の行事を味わいながら過ごす機会が少なくなっていると最近思うようになりました。そこで日本の大切な季節の行事を地域で行えればいいなと思っています。地域内での交流がたくさんある、そんな広島になって欲しいです。

災害を力に変えて

《高校生・一般の部 入選》

広島皆実高等学校一年 藤田 希羽

私のふるさととは将来、災害に強く、災害を全国に伝えられるような町になってほしいと思う。

七月六日の夜、長く続いていた豪雨の影響により、私の町は大きな被害を受けた。私自身も被害を受け、先の見えない日に苦しんでいたのを今でも覚えている。そんな時に私に元気をくれたのはボランティアの方々だ。猛暑の中、一日でも早く復興できるようにと一生懸命サポートしてくれた。三年が経とうとする今、こんなにも早く復興できたのはボランティアの方々、物資を送ってくれた方々など、たくさんの方のおかげであり、とても感謝している。

災害はとても大変だったが、この経験を力に変えて、今私達にできることは、災害に強い町作り、災害を伝えることだと思う。もう二度と、災害で死者がでないようにするために若い私達が一歩ずつ前に進み、もう一度この町に住みたいと思えるような町作りをしていきたい。そして後世へと、この経験を伝えていく必要がある。

周りを見て行動できる社会に

《高校生・一般の部 入選》

可部高等学校二年 門屋 愛泉

私は、もっと過ごしやすいうちの市になって欲しいです。

通学や通院でいろいろな時間帯に電車やバスを利用しますが、マタニティマークをつけている人が優先席の近くで困っていても誰も席を譲ろうとしなかったり、ヘルプマークをつけている人に誰も声をかけない場面を見ると、私だったら………と、思ってしまう。

バスを利用しているときに、サラリーマンの人が赤ちゃんの泣き声に大きな声で文句を言っている場面に遭遇したことがあります。赤ちゃんとお子さんを二人連れてバスに乗っていらしたので三人とも泣いてしまっただけでバス停で降りてしまいました。しかし、私は何もすることができませんでした。

優先席には必要としている人以外は座らない、小さい子が泣いていても周りは温かい目をむけることができるそんな広島市がいいなと思いました。そしてこれからはどんな場面でも困っている人がいたら声をかけて人の助けになりたいです。

豪雨災害の被害を少なくするために

《高校生・一般の部 入選》

可部高等学校二年 室崎 乃依

広島市は夏の時期になると、豪雨によって起こる、災害の被害が多いのが問題である。災害が起こりやすいのは、山が多く土砂が流れやすい、川が氾濫し洪水が起こるなどの地形の問題でもある。

被害の拡大を防ぐ為に私たち高校生が出来る事は二つある。一つ目は学校で豪雨災害の被害について学ぶ事である。学校で自分が住んでいる地域の避難場所や危険区域について学ぶ事によって身近に感じるからだ。二つ目は地域の避難訓練に参加する事である。学校の避難訓練ではなく地域で参加する事によって、普段からコミュニケーションを取り、災害が起きた時にスムーズに避難できたり地域の方達と一緒に避難する事が出来るからだ。

これらの解決策は高校生の私たちでも始められる事だ。自然災害はいつ起きるか分からない。被害が起きてから行動するのは遅い。だからこそ、被害が起きる前から自分たちが出来る事を増やし、実行していくことが大切だ。

私達にできること

《高校生・一般の部 入選》

広島皆実高等学校三年 屋野丸 芙佳

私は、私達の住む広島市が将来、地球にやさしいまちであってほしいと考える。

私は最近、「フードロス」と「飢餓」が同時に起きているという問題を目にした。食料の不足により慢性的な栄養失調に苦しむ人がいる反面、先進国では生産された食品の3分の1が捨てられている。これらの問題を解決するためには、私達が常に食品をロスしてしまわないよう、意識しながら生活していくことが重要だと考える。例えば、スーパーなどで陳列されているものを後ろの方から取ることを控えたり、食品を保管する際に消費期限、賞味期限を細めに確認することを心掛けることで、まだ食べられた食品を捨てなければいけないという状況が減らせるだろう。そうなれば、本当に必要な量を見極められ、余った食品は食べられるうちに食料が不足している国へ供給することができると考えた。

私はこれから、普段の生活の中で食品ロスが減らせるよう、消費期限・賞味期限を確認することや旬の食材を食べるようにすることを意識していきたいと考えた。

魅力を伝える広島に

《高校生・一般の部 入選》

広島皆実高等学校三年 丸山 祐季

広島市は平和都市として国内外から多くの人が訪れる豊かな都市である。観光産業による市の活性化と平和都市として担う役割は将来においても重要であり続ける。

平和都市ヒロシマを存続し続けるための課題は、平和のあり方と核兵器の恐怖について次世代や観光客に伝える人材の育成だと考える。このことは、「平和と公正をすべての人に」という開発目標につながるだけではなく、広島観光産業においても必要となる。魅力的な観光資源が存在するだけでは人は集まらない。その魅力を上手く来訪者に伝えることが重要で、自らの暮らす地域の魅力を理解し、まちづくりに取り組む市民も重要な資源である。

このように広島市に住む私たちが地域の魅力を再確認するため、文化的背景や歴史について学ぶ姿勢を持つことが広島魅力を発信する、人材としての資源の形成につながると思われる。地域をより深く知ることによって愛着を深め、観光客にも「また訪れよう」と思ってもらえるようなまちにしたい。

高校生も元気に挨拶を

《高校生・一般の部 入選》

広島皆実高等学校三年 川野 遥

私は高校三年生です。家から遠い学校に通っているため初めは通学の時知らない道、知らない人だらけでとても緊張して心細い思いをして高校に通っていました。しかし通学路には毎朝おはよういつてらっしやいと声をかけてくださるボランティアの方や、夕方におかえりなさいと声をかけてくださる駐輪場の方がいます。そんな方たちの温かい挨拶や声かけに私はいつも安心感を感じています。そのおかげで緊張も和らぎ、今では心細い思いはしていません。だから私は町の方々に感謝しています。しかしそんな優しい方々の挨拶に返事をせず、不愛想に通り返りすぎる高校生をよく目にします。高校生になるとなんだか恥ずかしくて気がつかないふりをしてしまう気持ちも分かります。だけど挨拶を返すと自分も相手も気持ち晴れて、元気がもらえると私は思っています。大切にすべきだと考えています。だから私は挨拶は積極的に返すようにし、この連鎖が続いてくれることを願っています。高校生も小学生の時のような挨拶を思い出して当たり前に行えるようになってほしいです。

広島だからできること

《高校生・一般の部 入選》

広島皆実高等学校三年 生徒

みなさんは八月六日と聞いて何を思いうかべるでしょうか。私は広島に原子爆弾が投下された日と考えます。それは小学生の時から平和学習を受けてきたからだと思いませんが他県には全く知らない人がいることに驚きました。そこで広島はより多くの県・国に原爆の恐ろしさを広めていくべきだと考えました。

まず今問題視されていることは被爆者数の減少です。実際に体験したからこそ伝えられることがこれから先、直接話して伝えられなくなっていくます。そこで必要とされるのは直接お話を聞くことが出来た私達です。広島には原爆ドームや平和記念公園をはじめ、数多くの平和関連施設があり、被爆の痕跡や復興の証を見せることができます。これらのことを合わせたビデオを製作し、オンライン上での平和学習をするなどで問題解決につながる上に多くの人に知ってもらおうことができ、核兵器廃絶にもつながると考えました。

広島だからできることをSDGsを達成できるように平和な世の中にするために原爆の恐ろしさを伝えていけたらと思います。